

# 縄文時代前期の石皿状土製品について

関根慎二

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1. はじめに

2. 石皿状土製品を出土した遺跡

3. 石皿状土製品の概要

4. 孔を持つ石皿と石皿状土製品

## — 要旨 —

県内の縄文時代前期諸磯段階の遺跡から石皿状土製品が出土している。石皿状土製品の検出例は、現在の所県内で3例が知られている。石皿状土製品は、遺物としてあまり認知されているものではない。石皿状土製品の資料を紹介することで、縄文時代前期の遺物として広く認知されることで資料が増えることを期待する。さらに、石皿状土製品の性格を石皿と対比させて検討した。石皿は、第一の道具・第二の道具の二面性を持つ道具である。石皿状土製品を第二の道具として位置づけ、磨面に孔を持つ石皿と比較し、祭祀儀礼行為の中で石皿状土製品の性格を検討する。

### キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 関東

研究対象 縄文前期石皿状土製品

## 1. はじめに

縄文時代の遺跡から出土する石皿は、第一の道具として植物加工などを行う日常的な道具である。通常、磨石を上石として、石皿を台として対象物を磨り潰したり、粉碎する機能を有する道具である。石皿の持つ機能は、打割、粉碎、磨り潰しから、主として堅果類加工の道具であり、縄文時代の植物食を支える重要な道具として捉えられてきた。石皿は、人間が食べて生きるということに、密接に関連した道具と言えよう。人間の食べて生きるという行為に関連づけることで、石皿は、第一の道具としての重要な役割を持つ道具として考えられてきた。また、石皿の第二の道具としての利用は、集石遺構に石皿を配置した例や石棒とともに出土した例、故意の粉碎により炉石として利用した例、住居内出土・埋葬施設からの出土例などがある。石皿を単なる廃棄として捉えるのではなく、第一の道具から第二の道具へと転用し、祭祀・儀礼のための道具としての性格（祭性）をも解釈しようとしてきた。（岡本1978・鈴木1991・中島2008）

以上のように石皿の用途は、第一の道具、第二の道具としての両方の性格を持つ遺物である。これが土偶・石棒などの第二の道具として、はじめから作られたものとの違いであり、研究の方向性を多方面にしている。

本項で取り上げる石皿状土製品とは、粘土により石皿を模倣して作られたものである。大きさは、5 cm～10 cm程の小形のものである。縄文時代の実用の深鉢に対して、小形の実用に適さない土器を総称してミニチュア土

器と呼ぶこともあるが、これに相当する遺物である。県内では、中野谷松原遺跡（大工原1998）で発見されたのがおそらく最初であり、報告書中に「石皿状土製品」と呼称していることから、この名称を使用する。

この遺物に対しては、出土例が少ない希少な遺物のため、詳細に報告されることが少ない遺物であった。県内でも報告例が少なく、管見に触れたのは縄文時代前期のもので3例あった。<sup>(註1)</sup> 石皿は、先程あげたように第一の道具とともに、その出土状況の検討から、第二の道具としての役割を求める論考が多くなってきていている。今回、石皿状土製品の性格について、石皿の第二の道具としての例と比較検討してみたい。このことにより、石皿状土製品が広く認知され報告例が増えることを期待したい。

## 2. 石皿状土製品を出土した遺跡

### 安中市中野谷松原遺跡（大工原1998）

**遺跡の概要** 群馬県安中市中野谷松原にある。本遺跡は、横野工業団地造成に伴い1992年から1993年にかけて、安中市教育委員会により発掘調査された。縄文時代前期中葉から後葉（有尾式期～諸磕b式期）を中心とした大規模な集落遺跡である。他にも中期後半～後期にかけての遺構もある。前期のものは、調査区内には、数十棟の大形掘立柱建物跡群や大形住居跡、二百基以上の土壙墓群、四百基以上の土坑などが検出されている。これらの遺構群の関係から、本遺跡は長期間にわたり安定して存続した集落として捉えられる。出土遺物も膨大な量にな

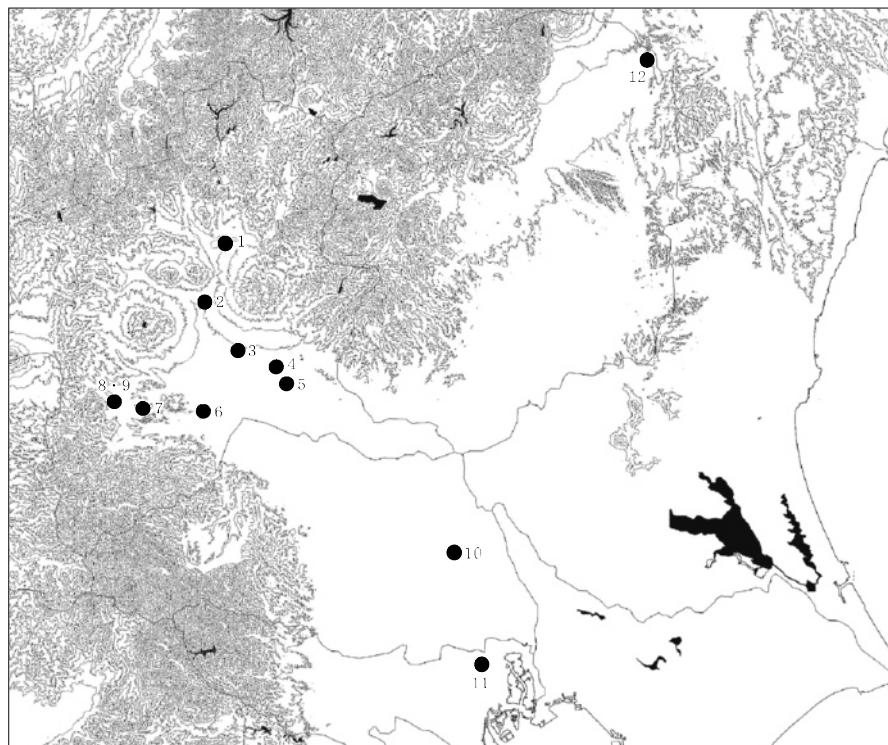


図1 石皿状土製品・孔を持つ石皿出土遺跡

- 1 糸井宮前遺跡
- 2 白井北中道・白井十二遺跡
- 3 芳賀東部団地遺跡
- 4 今井三騎堂遺跡
- 5 大上遺跡
- 6 山名柳沢遺跡
- 7 中野谷松原遺跡
- 8 行田梅木平遺跡
- 9 行田大道北遺跡
- 10 天神前遺跡
- 11 七社神社前遺跡
- 12 鹿島脇遺跡

り、遠隔地からもたらされた希少な遺物もある。特に黒曜石交易の拠点的な集落であったとしている。

#### 伊勢崎市大上遺跡（橋本2008）

**遺跡の概要** 群馬県伊勢崎市上田町（旧佐波郡東村大字上田）地内に立地する。本遺跡は、北関東自動車道建設に伴い2001年6月～2003年9月にかけて、群馬県埋蔵文化財調査事業団により調査された。本遺跡は、旧石器から縄文時代、古墳時代のものである。特に、縄文時代では、前期後半諸磯c式期住居14軒、十三菩提式期1軒、後期初頭2軒、土坑362基、集石土坑2基等が検出されている。諸磯c式期の大形住居の存在や住居がまとまって検出されている。また、信州系の下島式・東北系の大木式、東関東系の浮島式土器などが多く出土している。これらのことから、当該期における、この地域の拠点的集落と考えられる。

#### 渋川市白井北中道遺跡（註2）

**遺跡の概要** 渋川市子持大字白井（旧北群馬郡子持村）地内に立地する。本遺跡は国道17号鯉沢バイパス建設に伴い2003年～2006年にかけて、群馬県埋蔵文化財調査事業団により断続的に調査された。縄文時代から古代にかけての遺跡である。縄文面は、榛名火山灰（Hr-FP）層下にある。調査区内に6軒の縄文時代前期住居跡を検出した。諸磯式・大木式・浮島式土器などが出土している。本遺跡は、現在整理中で、2009年度刊行予定である。

遺跡名は異なるが、隣接する遺跡に白井十二遺跡がある。白井十二遺跡とは、字名で別遺跡になっているが、

縄文時代遺構の存在する地形面は連続しており、白井北中道III遺跡とともに同一の集落遺跡として捉えられる。白井十二遺跡からは、諸磯b～c式期の住居跡12軒検出されて、出土遺物も諸磯式土器、浮島式土器、大木式土器などが出土している。また、小形石棒などの特殊遺物の出土も見られる。これらのことから両遺跡を合わせた諸磯式期の集落は、この地域の拠点的な集落と考えられる。

以上、石皿状土製品の出土遺跡は、県内でも諸磯式期の拠点的な集落から出土している。

### 3. 石皿状土製品の概要

図3の1は石皿を、2は磨石を模したミニチュア土製品である。報告書によると、中野谷松原遺跡56号住居から出土している。住居跡の覆土中2層から出土している。本住居跡は、深さ95cmを測り構築から遺物の廃棄までを5段階に分けている。①最初の住居の構築。②貼床を施した住居への改築。③住居内土坑の掘削、初期三角堆積（人為的か？）。④遺物の大量廃棄、焼却を伴う行為。⑤焼却後の廃棄。これらの段階で資料にある石皿状土製品は、⑤の焼却後に廃棄された遺物である。同時期に廃棄された遺物は諸磯b中段階後半期の物である。同じ層位からは、深鉢形のミニチュア土器が出土している。また、下層からは、有孔浅鉢のミニチュア土器が出土した。

本住居からは、諸磯b式中1段階から中2段階の遺物が出土している。石皿状土製品出土の層位では、諸磯b

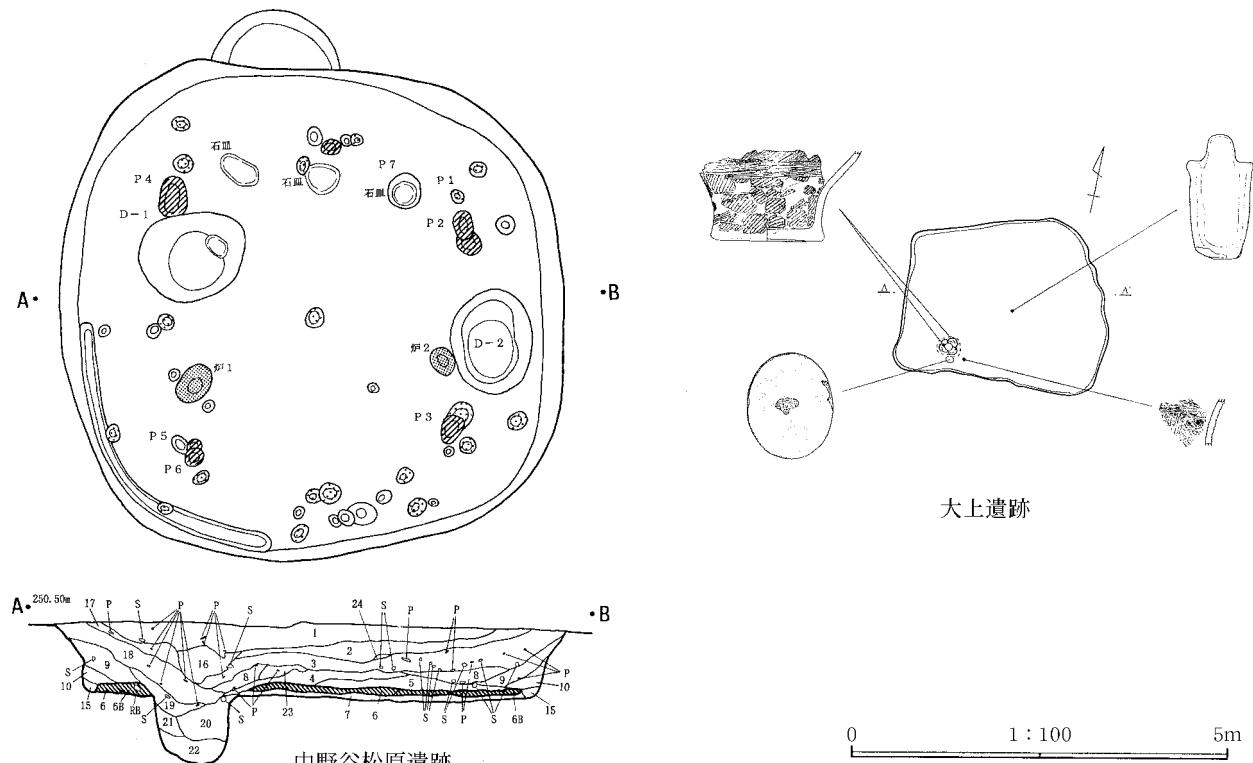


図2 石皿状土製品の出土遺構

中2段階の遺物が多く出土していることから、この段階のものと考える。

報告者によると石皿状土製品は、橢円形で縁を持ち、掃き出し部が付く。凹み部は、広く平坦になっている。内面は黒色となっており、沈線により石目を表現している。おそらく結晶片岩の石目を表現したものと推定している。石皿状土製品とセットになる磨石を模した土製品が同じ層位、区から出土している。この磨石状土製品は、橢円形を呈し、端部に刺突により小さな盲孔がある。当地域では、石皿の石材に結晶片岩があり、片岩性の石皿を模倣した物と考えられる。石皿状土製品は、縦5.8cm、横3.2cm、厚さ1.6cm、磨石状土製品は、縦3.2cm、横1.7cm、厚さ1.2cmを測る。

3は、大上遺跡出土の石皿状土製品<sup>(註3)</sup>である。報告書によると、IV-2号住居の遺構床面から若干浮いた覆土中から出土している。本遺構は、東西に主軸を持つ不正長方形を呈する。長辺2.7m×短辺2.2mを測る。確認面から床面まで6cmほどの浅い遺構である。炉・柱穴とも検出されなかったことから、住居ではなく、小堅穴の可能性も報告書では指摘している。同じ遺構からは、諸磯b式終末段階・諸磯c式新段階の深鉢、磨石が出土していることから、諸磯b終末～諸磯c段階になると考える。

遺物を観察すると、有縁で、掃き出し部が突出し、側縁部はつまみ上げて作っている。器表面は丁寧になでられている。中央部磨面は、裏面に比べ平坦で特に磨き痕が残っている。側面に比べなめらかである。縦6.5cm、横3.5cm、厚さ1.5cm、重さ27グラムを測る。

4は、白井北中道III遺跡出土の石皿状土製品である。IV区5号遺物集中箇所から出土している。本遺構は、掘り込みではなく、地山上に大小の礫、多孔石、土器片が集中して出土している。ここからは、諸磯c式土器深鉢のミニチュア・有孔浅鉢等の祭祀性のある遺物が出土している。これらのことから、遺物の廃棄場あるいは、祭祀遺構の可能性が考えられる。遺構内では、諸磯b古段階から諸磯cにかけての土器が出土していることから、本遺物は、この時期の所産と考えられる。

本遺跡出土の石皿状土製品は、長方形で縁を持ち、掃き出し部が付く。側縁はつまみ上げて作っており、側縁に指頭によるナデ痕が残る。磨面は、広く平坦に作られ側縁に比べなめらかである。裏面は、整形時のナデが残る部分と敲打による凹凸面を持つ部分がある。石皿の裏面にしばしば見られる敲打痕や円錐形の凹みを表現しているかとも思われる。縦8.9cm、横5.5cm、厚さ2.2cm、重さ96グラムを測る。

石皿状土製品は、中野谷松原遺跡例の諸磯b中段階後半段階、大上遺跡例は、諸磯b終末段階～諸磯c段階。白井北中道III遺跡例は、諸磯b古段階～諸磯c段階の深

鉢と共に出土している。このことから、これらの石皿状土製品は、諸磯b～諸磯c式期にかけての遺物と言えるであろう。

以上、石皿状土製品について出土状況・概要について紹介した。図3は、諸磯期の石皿で、左側に先に挙げた石皿状土製品、右側に形態の近い石皿を参考に掲載した。これらの、オリジナルの石皿と図上の比較ではあるが、形状は似ていることが理解できるかと思う。

#### 4. 孔を持つ石皿と石皿状土製品

オリジナルの石皿と比較して、石皿状土製品の形状、雰囲気は、大きさを除いてほぼ相似形をしていることが理解できる。このことから石皿状土製品は、石皿を模倣した遺物として捉えられると思う。模造品は、石製・土製・木製など異なる素材で作られるが、普通言われる模造品の多くは、古墳時代に発達したものである。主として、実物を模倣した小形粗製の仮器として定義されている。模造品の用途としては、古墳やこの時代の祭祀遺跡から発見されるものは、実用のものではなく祭祀・供獻的な性格を持ったものと考えられている。

石皿は、第一の道具と第二の道具としての機能も併せ持つ道具である。石皿に係わる儀礼行為については様々な研究があるが、今回、石皿状土製品とほぼ同じ時期に見られる孔を持つ石皿について検討し、縄文時代の石皿状土製品についても、古墳時代の模造品同様の役割を持っているのか、オリジナルの石皿を検討することから考えてみたい。

諸磯期の石皿の出土状況を見ると、住居床面や石囲炉の炉石、墓壙内、土坑内等様々な出土状態である。古墳時代の模造品は、古墳の副葬品や祭祀の場に供獻されるものである。このことは、一回限りの使用を前提としている。であるならば石皿についても一回限りの使用、再生できない状態での例はないのだろうか。石皿の祭祀・儀礼行為には、石皿を分割・破碎したものによる祭祀行為、石皿を分割せずに完形品のままによる祭祀行為が考えられてきた。石皿状土製品が分割されずに出土していることから、オリジナルの石皿での祭祀行為にも、分割が伴わない祭祀行為があったのではないだろうか。分割を伴わない祭祀行為と考えられるものに、磨面中央部に孔を持つ石皿の存在がある。この石皿は、過度の使用により磨面に穴が開いたというより、故意に穿孔しているものである。孔を持つ石皿は、分割もされたものでもなく、完形品でもない。使用できない状態での、一回限りの儀礼行為のため穿孔されたものと考える。

始めに、孔を持つ石皿の出土例から検討してみようと思う。前期の孔を持つ石皿を出土した遺跡は、群馬を中心に中野谷松原遺跡（安中市）、行田梅木平遺跡（旧松井田町・現安中市）、行田大道北遺跡（旧松井田町・現安中

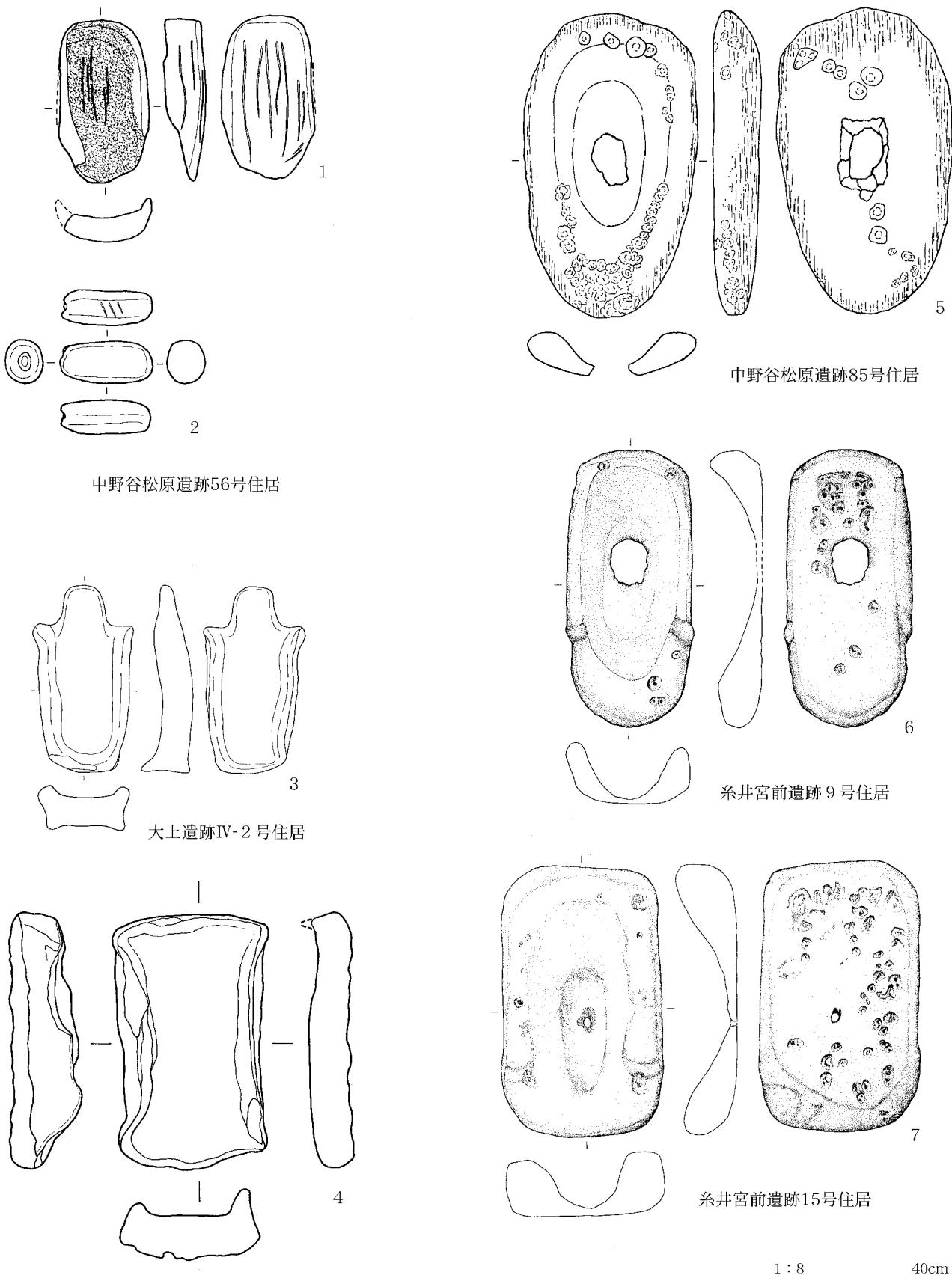


図3 石皿状土製品と孔を持つ石皿

市)、今井三騎堂遺跡(前橋市・伊勢崎市)、芳賀東部団地遺跡(前橋市)、糸井宮前遺跡(昭和村)、山名柳沢遺跡(高崎市)、七社神社遺跡(東京都北区)、天神前遺跡(埼玉県蓮田市)、鹿島脇遺跡(栃木県那須町)などが知られる。

中野谷松原遺跡では、3個体出土している(図3・5)。有尾式期、諸磯a式期、諸磯b式期の住居から検出されている。有尾式期のものは、22号住居跡内のピットに埋設されていた。諸磯a式期の85号住居跡出土のものは、炉跡に伏せた形で出土している。諸磯b式期の101号住居跡出土の石皿は、床面炉近くに置かれた状態で出土している。

行田梅木平遺跡(間宮1997)では、諸磯a式期の1号住居跡床下土坑から出土している(図5)。

行田大道北遺跡(長井1997)では、2例検出されている。有尾・諸磯a式期の26号住居跡から出土。ピットに蓋をするような状態で出土している。有尾式期の78号住居跡でも、ピットをふさぐような状態で出土している(図5)。

山名柳沢遺跡(松田1988)では、黒浜期の14号住居跡に孔を持つ石皿が炉跡として転用されている。床面よりやや浮いた状態で石皿が検出されている。石皿の回りには、円礫が取り囲んでいた。報告では炉跡として疑問ともしている(図6)。

今井三騎堂遺跡(石坂2005)例は、諸磯a式期の36号住居跡床面に大形の磨石が乗った状態で出土している。

芳賀東部団地遺跡(井野1990)では、諸磯a式期のJ24号住居跡から出土している。床面に置かれた状態で出土している(図5)。

糸井宮前遺跡(関根1987)では、2例検出されている。15号住居跡では3個の石皿が床面に置かれた状態で出土した。内1個が孔を持つ石皿である。本住居からは、諸磯c式新段階の土器が出土していることから諸磯c式期

表1 孔を持つ石皿出土遺跡

遺跡名	遺構	時期	出土状況	状態	共伴物
中野谷松原	22住	有尾末	土坑内	直立	
	85住	諸磯b	覆土	裏	
	101住	諸磯a新	床直上	表	
行田梅木平	1住	諸磯a	土坑内	直立	
	26住	諸磯a	不明	不明	
行田大道北	78住	黒浜	ピット上	表	
山名柳沢	14住	有尾	炉・床上	表	円礫
今井三騎堂	36住	諸磯a	床直上	表	磨石
芳賀東部	24住	諸磯a	床直上	表	
糸井宮前	15住	諸磯c	床直上	表	
	78住	諸磯b	覆土中	裏	有孔浅鉢
七社神社前	3住	諸磯a古	ピット上	表	石皿
天神前	2住	黒浜	ピット上 ピット上	表 表	凹石
鹿島脇	12坑	大木6	覆土上層	表	深鉢・礫

と考えられる。78号住居跡は、床面からやや浮いた覆土中に孔を持つ石皿と有孔浅鉢が対になり伏せた状態で出土している。共伴する土器から諸磯b新段階である(図3)。

七社神社前遺跡(川田・大平1998)では、諸磯a古段階の第⑥地点第3号住居跡床面のピットを蓋する状況で出土している。石皿には、孔をふさぐように石皿の破片が重なって出土している(図6)。

天神前遺跡(田中1988)では、2号住居跡から2例出土している。1例は、ピット上に蓋をするような形で置かれている。石皿の上には、さらに凹石が伴っている。

鹿島脇遺跡(塚本1988)では、大木6式期の12号土坑から出土している。石皿は、土坑覆土上層部に水平に置かれしており、出土状態から、「安置された」ものであろうと報告されている(図6)。

孔を持つ石皿の出土状況について出土状況をみてみると、1. 土坑内に直立。2. ピットや土坑に蓋をするような形で出土する。3. 炉の上や炉として使用されたり炉と関係する。4. 覆土中に置かれる。の4通りであった。さらに、土坑内から出土したものは、直立している。ピットや土坑の蓋状に置かれたものは、表面を上にしている。覆土中から出土したものは、裏面を上にしている。共伴した遺物では、円礫や磨石・凹石、石皿破片、有孔浅鉢、深鉢がある。

これらのことから、孔を持つ石皿の祭祀形態は、黒浜様式系列と、有尾様式系列の二通りに分かれるのではないか。黒浜様式の系列では、ピット上に蓋をするように石皿を置くという行為が行われている(天神前遺跡・七社神社前遺跡)。有尾様式系列では、土坑内に石皿を直立させて置く(中野谷松原遺跡・行田梅木平遺跡)。いずれの系列も黒浜・有尾から諸磯a式古段階にかけての祭祀行為と考えられる。諸磯a式～諸磯c式では、床面に石皿を置くという祭祀行為が行われる。このことは、諸磯a式古段階以降石皿の祭祀形態の変化としてみることができると思う。さらに諸磯b段階になると、中野谷松原遺跡・糸井宮前遺跡に見られるような、住居の埋没覆土中に、石皿を伏せて置く形の新しい祭祀行為が出現する。また、諸磯b後半段階以降になると、石皿と有孔浅鉢や深鉢等が一緒に出土する(糸井宮前遺跡・鹿島脇遺跡)例が見られた。諸磯b後半段階以降の時期には石皿と深鉢・浅鉢等を使用した新しい祭祀行為が、始まるのではないだろうか。

以上、前期後半期の孔を持つ石皿について、祭祀形態を検討してみた。これらの祭祀形態に照らし合わせてみると、石皿状土製品の時期は、諸磯b後半～諸磯c段階のものである。

その出土状況は、住居の覆土中(中野谷松原遺跡)、住居覆土中(大上遺跡)、遺物集中箇所となっている。この



図4 孔を持つ石皿出土遺構

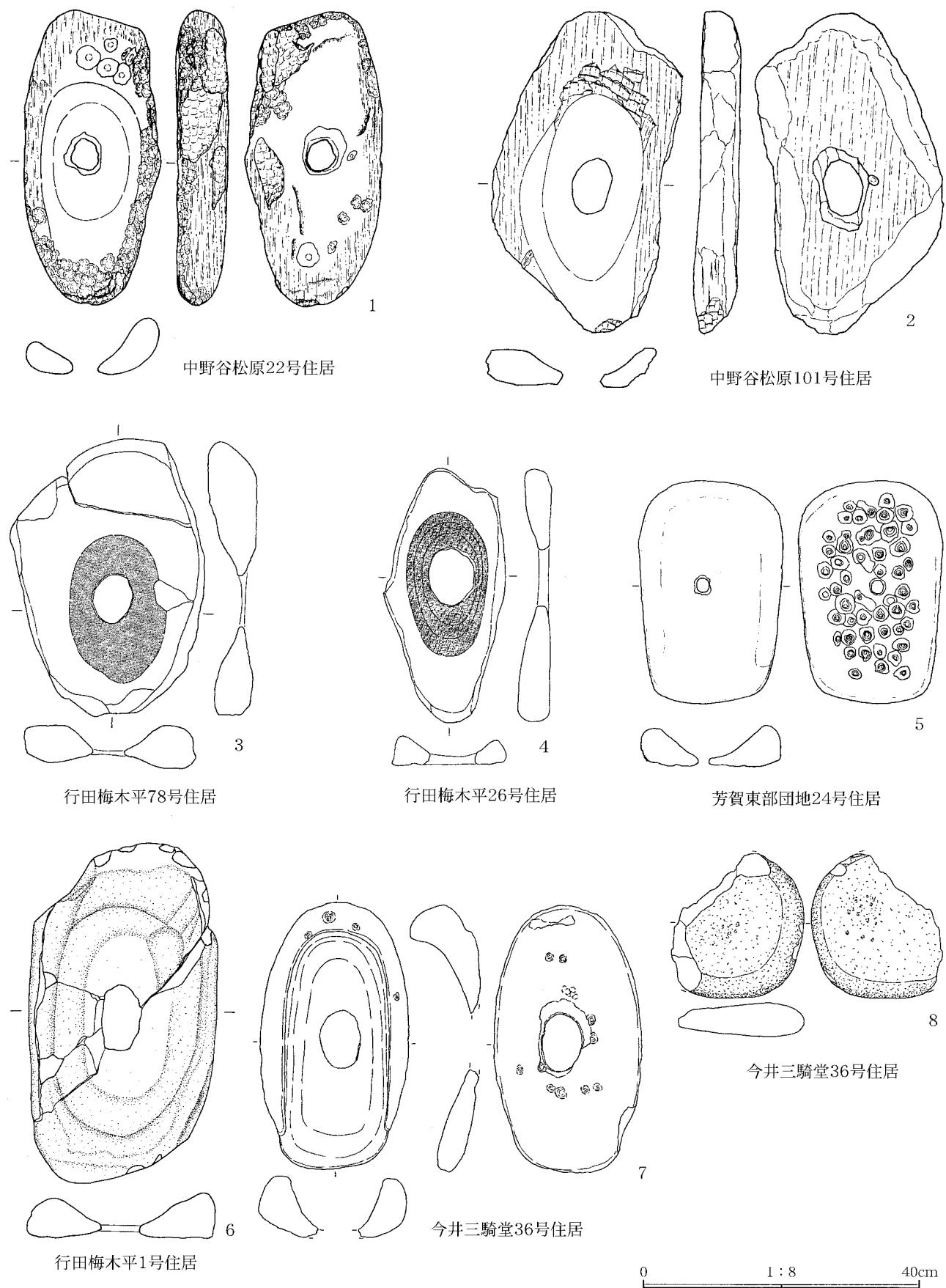


図5 孔を持つ石皿と共に伴遺物(1)

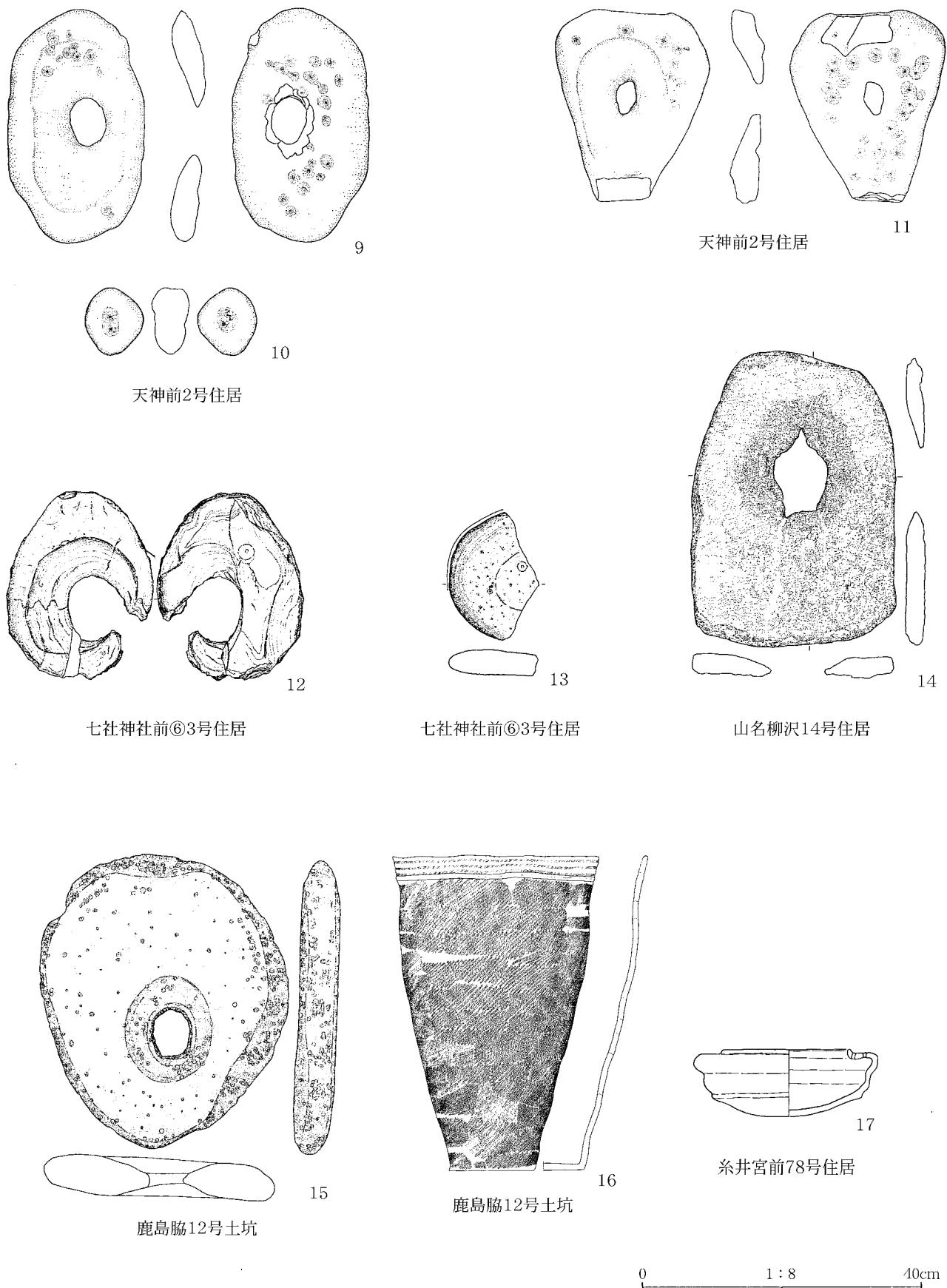


図6 孔を持つ石皿と共に出土した遺物(2)

ことから石皿状土製品の祭祀形態は、有尾・黒浜段階にあるような住居床面に置かれるものではなく、諸磯b段階以降の遺構覆土中、或いは特別な場所に置かれる祭祀形態に近いのではないかと考える。孔を持つ石皿が置かれる住居は、集落にある全部の住居にあるわけではなく、特別な住居に置かれていた。諸磯b後半段階においても、石皿や石皿状土製品の置かれる埋没途中の住居や遺物集中箇所といった場所が、集落の特別な場所なのだと考える。特別な場所に第二の道具（石皿状土製品）を置くことで、何らかの祭祀が行われるのは、古墳時代の模造品に通じるのであろうか。

諸磯b後半段階の特殊な遺物として、胴部にくびれを持つ有孔浅鉢（所謂UFO形）が盛行する。この有孔浅鉢のミニチュア土器も中野谷松原遺跡を始め、県内の遺跡では出土している。糸井宮前遺跡例のように、石皿と有孔浅鉢が出土している例をみると、石皿状土製品と有孔浅鉢のミニチュア土器の祭祀もあるのではないかと考えている。谷口氏は、中期の石皿と大形石棒を対にした出土状況の中に、性交の隠喩表現を見いだしている（谷口2006）。糸井宮前遺跡例にあるような括れを持つ有孔浅鉢を伏せた状態で見ると、石棒を上から見た状態にも見える。また、この時期、小形の石棒が東北地方を別にすると群馬を中心として多く出土し、中期以降の石棒成立の可能性も示唆している（松田2004）。今後、ミニチュアの有孔浅鉢、小形石棒、石皿状土製品の関係についても検討する課題としておきたい。

## 謝辞

本稿執筆にあたっては、次の方々にご協力・ご助言を戴いた。記して感謝いたします。特に未報告の資料について、快く資料提供いただきました、事業団当局・担当者には厚く御礼申し上げます。（敬称略）

樋崎修一郎（白井北中道遺跡整理担当）・大工原豊・橋本淳・谷藤保彦・長田友也

本研究は、平成20年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究助成金による成果の一部である。

## 註

- 1) 他に、石皿状土製品として長野県「棚畠」で中期のものがある。他に出土例があればご教授願いたい。
- 2) 本報告書は、現在整理中で群馬県埋蔵文化財調査事業団から2009年

度刊行予定である。

3) 報告書では、土偶として報告されているが、中野谷松原遺跡例と比較しその形態から石皿状土製品とした。

## 参考・引用文献

- 安達厚三 1983 「石皿」『縄文文化の研究』7 雄山閣 p.129-139  
 石坂 茂 2005 「今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 大場磐雄 1981 「神道考古学の大系」『神道考古学講座』1 雄山閣 p. 1-28  
 井野誠一 1990 「芳賀東部団地遺跡III」前橋市教育委員会  
 大場磐雄 1981 「総説」『神道考古学講座』3 雄山閣 p. 1-8  
 岡本孝之 1978 「住居内出土の石皿について覚え書き」『神奈川考古』3 神奈川考古同人会 p.31-48  
 長田友也 2008 「大型石棒にみる儀礼行為」『考古学ジャーナル』578 ニューサイエンス社 p.10-13  
 川田 強・大平理恵 1998 「七社神社前遺跡II」北区教育委員会  
 齋藤 聰 2008 「白井十二遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 齋藤 忠 1992 「石製模造品」『日本考古学用語辞典』学生社 p. 241-242  
 齋藤 忠 1992 「石皿」『日本考古学用語辞典』隔世社 p.22  
 佐野 隆 2008 「縄文時代の住居廃絶に関わる呪術・祭祀行為」『考古学ジャーナル』578 ニューサイエンス社 p.30-34  
 鈴木保彦 1981 「信仰儀礼の遺構」『神道考古学講座』1 雄山閣 p. 58-107  
 鈴木保彦 1991 「第二道具としての石皿」『縄文時代』2 縄文時代文化研究会 p.39  
 関根慎二 1986 「糸井宮前遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 大工原豊 1998 「中野谷松原遺跡」安中市教育委員会  
 大工原豊 2008 「儀器化された石匙・石槍」『考古学ジャーナル』578 ニューサイエンス社 p.5-9  
 田中和之 1988 「天神前遺跡-第8地点-」蓮田市教育委員会  
 谷口康浩 2006 「石棒と石皿」『考古学IV』 p.77-102  
 谷口康浩 2008 「総論 コードとしての祭祀・儀礼」『考古学ジャーナル』578 ニューサイエンス社 p.3-4  
 塚本師也 1988 「鹿島脇遺跡・追の窪遺跡」栃木県教育委員会  
 中島将太 2008 「石皿に関わる儀礼行為」『考古学ジャーナル』578 ニューサイエンス社 p.14-18  
 長井正欣 1997 「八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡」松井田町遺跡調査会  
 永峯光一 1981 「縄文儀礼要説」『神道考古学講座』1 雄山閣 p. 49-57  
 永峯光一・館野 孝 1981 「信仰儀礼にかかわる遺物(II)」『神道考古学講座』1 雄山閣 p.129-143  
 能登 健 1981 「信仰儀礼にかかわる遺物 (I)」『神道考古学講座』1 雄山閣 p.108-128  
 橋本 淳 2008 「大上遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 松田政基 1998 「山名柳沢遺跡」高崎市遺跡調査会  
 松田光太郎 2004 「縄文時代前期の小形石棒に関する一考察」『古代』116 早稲田大学考古学会 p.1-17  
 間宮政光 1997 「行田梅木平遺跡」松井田町遺跡調査会  
 山本暉久 1978 「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3 神奈川考古同人会 p.49-93